

青山学院女子短期大学同窓会関西支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1953（昭和28）年から1965（昭和40）年卒まで

西山 利佳

はじめに

本稿は関西支部の卒業生3名からの聞き取りのまとめになる。関西支部では2022年、関西支部の取りまとめによる調査を行った。

調査対象となった卒業生の卒業年、学科、在住県は次のとおりである。A（昭和28年英文科卒・兵庫県）、B（昭和40年国文科卒・兵庫県）、C（昭和40年家政科卒・兵庫県）。Aは大阪市内で、B・Cは神戸市内で同席の上、B、Cの順で各々聞き取りを行った。Aは小林瑞乃を主な聞き手として、河見誠、西山が、B・Cは西山が主な聞き手となり、小林と共に聞き取りを行った。AとB・Cではちょうど一回り世代が違い、また、わずか3名の調査となるため、普遍性を見出すより、個別事例の整理になることをあらかじめお断りしておく。以下、聞き取り対象者に事前に伝えておいた質問項目に従ってまとめていくが、節タイトルは質問項目の表現そのままではない。また、順を追って問うていくものの、当然ながらそこから思い出されることが、問いを離れて展開していくので一問一答の記述式アンケートのようなわけにはいかない。行きつ戻りつしながら話されたことを、改めて当初の問いの枠に整理しなおしてまとめることになる。なお、聞き取り対象者は「青短」という略称は口にせず、3名共に基本的に「青山」と呼んでいたが、発言の引用以外は「青短」と記載していく。

聞き取り対象者一覧

	卒業年	学科	出身県
A	1953（昭和28）	英文	島根
B	1965（昭和40）	国文	神奈川
C	1965（昭和40）	家政	神奈川

1. 出身高校と女子の進路選択

青短2期生であるAさん（1953年英文科卒）は、戦後の学制改革の過渡期に中高生時代を送られている。そのため、入学時は高等女学校だったが卒業時は共学の島根県立松江高

等学校となっていた。「教科書があっても、ないような時代」、新制大学も入学願書を出せば通るような過渡期だった。女子も主に進学した印象を持っているとのことだった。

Aさんはもともと大阪の豊中で生まれ育ち、戦時中父親の仕事の関係で松江に移ってきていたためいずれは帰りたいと思っていた。そして、「都会に帰るんだったら、東京に出てみたい」と考えていたところ、聖路加出身の保健室の若い先生が青山学院を「すごくおしゃれな学校よ」「生徒さんはみんな垢抜けしてる」と勧めてくれたのが青短受験のきっかけという。松江高校の進学クラスにいたのだが、そこから「青学」(青短)を受けたのは二人だった。出ても関西どまりが多かったというし、妹がひとりいるふたり姉妹という家庭環境から考えると、家を離れることに家族の反対があったのではないかと懸念されたが、「リベラリスト」の父が「自由にしていよいよ」と言ってくれたとのことだった。青短に合格したら「もういいわ」と思い、他大は受験しなかったという。学科は「青学だったら英文科かなあ」と思い、英文科を自ら選んだということだった。

Bさん(1965年国文科卒)の出身校は神奈川県立小田原城内高等学校(2004年、県立小田原高等学校と統合)。進学校として有名な女子高で9クラス中5クラスが進学コースで、進学コースでないクラスでも短大やドレスメーカー学院や文化服装学院などに1クラス50人中40人ぐらいは進学していたと記憶しているとのことだった。四年制大学にも津田塾大学、お茶の水女子大学、慶応、早稲田といった難関校に10人ぐらいは行っている。東京教育大にも3人ぐらい進んだ。また、「フェリス塾」と言われていたくらいフェリス女学院に多数進学していたという。

Bさんは、4人きょうだいの長女で、下に妹ひとり、弟ふたりがいたため「おまえは短大にしてくれ」「四年制に行くんだったら、横浜国大だったら良い」と父親に言われ青短のみを受験し他大は一切受けなかったという。父親は自身が神奈川師範出だったので「横国なら」と言ったのかもしれないとのことだった。肝心のなぜ青短を選んだのかという問いに対する直接的な言葉を引き出すことはできなかった。ただ「正解でした」のひと言で、青短を受験し合格したことが全面的に肯定されていることが強く伝わってきた。青短在学が前提となって、話が弾んでいったのでそこに立ち戻れなかったというのが実情である。

国文科選択については、はっきりと自覚した理由が語られた。小学生時代、「ちっちゃい田舎の小学校」の図書館の本を全部読んでしまい、読みたい本がなくなったので徒歩3分ほどだった母親の実家の子ども部屋に残っていた、母たちが子どもの頃に読んだ本までこもって読むほど本好きだったという。体が弱かったこともあって、そのように屋内で本を読んで過ごす時間が長かったという背景は大きい。そのエピソードの前に語られたことが非常に印象的だった。英文科ということも考えたが「英文と一生付き合うわけじゃないだろう」と。また、別の話題の中で「国文科っていうのを選んだのも、たぶん、一生ずっと生きていくにあたって、いろいろな形で役に立つんじゃないかと思いました」と語り、「家政科みたいに、簡単にお友達にもすぐにブラウスを縫ってくれた子もいて、そういう

役に立ち方もあると思うのですけど」と、実益的なものではない次元で人生に「役立つ」、「一生付き合う」と考えていることが、深く教養の価値をとらえておられる姿として印象深かった。

なお、当時は小田急線の急行を使えば小田原から1時間10分で新宿まで行けたとのこと、女の子が下宿なんてとんでもないという時代で、自身も特に下宿したいという考えもなかったため自宅通学だった。

Cさん(1965年家政科卒)もBさん同様神奈川県出身で、自宅から通学していた。出身校は都内の私立中高一貫校普連土学園¹。アメリカのクエーカー教徒が日本の女子教育のために資金を出して作られた学校で、ここには、母親の友人の娘さんが通っていていい学校だと言われて中学から入ったとのこと。ご家庭はクリスチャンホームではなく、ミッション系の学校に進学しようとして青短を選んだわけではないという。もとは四大の薬学部に行くつもりで勉強していたが、仲の良い友人が青短を受験するというので願書を取りに行くのに付き合っ、家政科が化学で受験できることを知り軽い気持ちで受験したら、受かってしまったのだという。母親からは「受かったんなら、青山でいいんじゃないの」と言われ、四大薬学部を受けることもなく入学を決めたとのことだった。「安易に入ってしまった。でも後悔してません。すごく楽しかったです」と語られた。

2. 青短に入って感じた自身の変化

Aさんがこの問いに対して話されたのは、クエーカーのクラスメイトのことだった。Aさん自身はすでにプロテスタントの教会で洗礼を受けていたが、クラスにクリスチャンがあまりいない中、内村鑑三の弟子の関根正雄が東大の教室を使って開いていた公開講座に誘われた際その中にいたひとりで、質素で飾り気のない人が、アメリカ文学史の授業のとき先生の誤りを正したことがあった。その後、京王線の国領にある「国領憩いの家」²で開かれていた聖書を読む会や修養会などで時間を共にし、卒業後も家族ぐるみで付き合う「一生の宝」だと語られた。おそらく、カルチャーショックも伴った強烈な出会いと、意気投合し生涯のつきあいとなったその友人との出会いが、Aさんの人生を画するものと認識されているから、その友人のことを熱をもって語られたのだろう。

Bさんは、女子校だったからか、「ずーっと、ひとつの学生時代」という感じで変わらなかったように思うが、ただ行動も友だちも豊かになったと話された。

Cさんは、中高一貫のミッション系女子校の普連土学園出であるため、なおのこと「延長の感じ」で変わったことと言えば、土日は休みだったのが土曜日も授業があるというぐらいだが、とにかく楽しかった、納得がいく学びで知識が広がったと振り返られた。

この問いに対して直接的で簡潔な回答が得られない場合の回答の傾向が、わずか3名であるがその語り方から見て取れるかもしれない。ひとつは、Aさんのようにその後続く大きな出会いを語る場合、もうひとつはBさん、Cさんのように問われるから強いて言う

ならという感じで、とにかく楽しかったと語る場合である。私たち聞き手は青短に入る前のことも背景として問いに入れていたが、聞き取り対象者の方々はこの機会に青短時代を振り返っているのです、どうしてもそこが起点としての振り返りになるので、この問いが答えにくいという面もあるのかもしれない。

3. 学生生活の思い出

事前に伝えてあるQ3は「特に記憶に残っていることについて教えてください（先生、友人、ゼミ、授業、礼拝※、学校生活、学生活動、寮、その他）※学生時代の基督教教育・礼拝の様子と、卒業後に与えた影響。」というものである。以下、「3-1 学業」で、教員や授業などを、「3-2 学業以外」でサークル活動やアドグルなどを、「3-3 学外での生活」で寮生活や短大の関係以外の場での活動を、「3-4 基督教教育関連」で宗教関連のエピソードを、そして「3-5 その他」で特に在学中に東京オリンピックを経験したB・C両氏のエピソードをまとめたい。これらも、例えば学内の友人関係で参加した学外の活動など、項目別に切り分けられるものではないので便宜的な部分がどうしても出てしまうことをお許しいただきたい。

3-1 学業

Aさん（昭和28年英文科卒）の場合：実にたくさんの具体的なエピソードを話してくださった。以下、上がった教員の名前とエピソードを挙げる。

- ・荒牧鉄雄先生³いきなり「皆さん行ったことがありますか？ ストラットフォード・アポン・エイボン」（シェイクスピアの生誕地）と聞いたりなさる。授業が楽しかった。ホイットマンの『草の葉』も一部分読んだ。
- ・西島正先生⁴テキストだった『幸福の探求—アビシニアの王子ラセラスの物語』（だと思われる）が「退屈でダメだわ」といった学生がいて、そのせいか2年目のテキストは『ウィンダム嬢夫人の扇』（オスカー・ワイルド）という喜劇でそれは楽しかった。
- ・菊地裕先生⁵桂冠詩人テニスの詩を2年間授業された。'Tis better to have loved and lost, than never to have loved at all.（「愛して失うのは、愛さなかったことに勝る」＝Aさんの言葉）を覚えておけと言われた。その発音が「すごくきれいだった」という。
- ・桜田佐（たすく）先生⁶ドーデの「最後の授業」を何べんも眼鏡をはずして涙を拭きながら、占領下の日本もひとつ間違えばどうなっていたかわからない！と授業された。
- ・川瀬一馬先生⁷国文科ではなかったが「花伝書」の授業を受けた。全然わからなかったが、振り返れば「あんな立派な人を教授に迎え」ていたことをすごいことだと思う。

Aさんの卒業と入れ違いに着任した加藤楸邨先生に関しても、ちょうど俳句に興味を持ち始めた頃、加藤先生の着任を知り「お金があったら」「楸邨さんの時間だけ」青山に受講しに行きたいなあと「ほんとに地団太踏んだことがあった」と語られた。

70年ほど前の授業をこれほど鮮明に覚えておられることに驚嘆したが、それは学んだ時の知的高揚感と、おそらくその後の人生でも繰り返し反芻されてきたことの表れではないだろうか。

Bさん（昭和40年国文科卒）の場合：

- ・馬越宮先生⁸の源氏物語を選択し、「須磨の巻」で原稿用紙50枚ほどの卒論を書いた。提出が10月だったので半年の間、集中して取り組んだ。馬越先生からAの評価もいただき、「私の宝物で、今でも大事にしている」。
- ・加藤楸邨先生⁹の存在を知っていたら選択していただろう。

Bさんは、のちに三人の子どもの母親になってからPTAの役員を務めるが、その中学のPTA主催で源氏物語講読会という講座があり、そのテキストが短大時代に使っていた池田亀鑑のテキスト¹⁰だった。「もうそういう形で、どこかで2年間学んだようなことが、なんとなく生きてるっていう感じ」だと語られた。また、卒論で取り組んだ「須磨」の近くに住むことになろうとは思ってもみなかったことで、そこにも運命的なものを感じ、青短での学びが人生と深く結びついていることを強く意識されていると感じた。まさに、国文科を選んだ「一生付き合える」「人生の役に立つ」という理由が、証明されているようである。

Cさん（昭和40年家政科卒）の場合：

聞き手側は、もともと薬学部に進みたいと考えていたCさんなので、化学実験などもやっていた家政科に入って理系の勉強に満足されたのではないかと考えていたが、それはあまりなかった、家庭生活には役に立ったのではないかという反応だった。そこで挙げられたのが、栄養学の西田寿美先生¹¹に「にんべん」に紹介してもらい、大学祭で出汁に関するグループ発表を行った体験である。のちに、関西に住むことになり出汁の知識があったことがとても役に立ったと思っているとのことだった。その他幅の広い知識と友を得られたと思うと振り返られた。

3-2 学業以外（サークル、アドバイザーグループなど）

Aさんは寮生で、キリスト教関係での人間関係や活動の話が多かったので、3-3、3-4項にまとめる。

Bさん、Cさんはともにテニス部だった。Bさんは中高通してテニスをやっていたためいちばんの経験者で部長も務めた。レギュラー選手として日本各地への遠征試合や合宿、そして、遠征資金やコーチ代などの資金稼ぎのためにダンスパーティーも開いたという。学生生活の「半分以上テニスが主体」だったというBさんは、当時のお写真も見せてくださり、はつらつとした笑顔が青春のすべてを物語っているようだった。ちなみに、慶応大学のテニス部のレギュラーだった方と2年の時に交際が始まり、のち、結婚されている。

片やCさんは、テニスコートの横を通ったとき「楽しそうだった」という理由で未経験ながら入部し、合宿や練習を重ね、試合に出ることもなかったが上達し良い運動になったと振り返られた。

テニス部の合宿のほかに、アドバイザーグループの旅行や希望者を募った九州旅行（Cさん）が楽しい思い出として語られた。

Bさんが青木孝先生¹²のアドバイザーグループで伊豆に一泊旅行した時のエピソードは興味深い。青木先生が参加学生に向かって、青短に来たのは「やっぱり、青短卒というレッテルが欲しいからじゃないか」と言われたという。Bさんは、そんなことは考えたこともなかったそうで「私は私だから」というような気持ちを持った記憶があるという。しかし、挑発的に感じるこの言葉にBさん含め反感を覚えることはなく、当時の青短の世間的な評価の高さを「そういうものなのか」と素直に受け入れたと語られた。青木先生の真意は確かめるべくもないが、強い印象を残している様子から、非常にラディカルな問いかけだったのではないかと思われる。

3-3 学外での生活

Aさんの場合：

天沼二丁目にあった「青山寮」が大きな屋敷を二分したもので、隣は角川グループ創業者角川源義氏の住まいだった。そのため息子の角川春樹氏が黒い帽子、マント、高下駄姿で電話を借りに寮の玄関に入ってきていた。一軒の家に複数の電話を引けない時代だった。寮は1、2階各2部屋で、1部屋にふたり。賄の女性の方がいておいしい食事、昼食のお弁当も出してもらっていた。卒業までその寮にいた。大学の敷地内にあったという「モンベル」「どんぐり」という喫茶店のこと、阿佐ヶ谷駅から青山寮までの途中で食べた35円ラーメン、ララ物資でもらった古着の話など70年前の東京の様子を垣間見ることができた。

3-4 キリスト教教育関連

Aさんの場合：

Aさんは高校時代に受洗し、大村勇先生の日本キリスト教団阿佐ヶ谷教会に通っていた。短大でキリスト教に出会ったわけではないが、2節で既述したように、「一生の宝」となったクエーカーの友人（普連土学園卒）の存在はとても大きいものだったとわかる。学校帰りも彼女の家（聖公会のクリスチャンホーム）に寄って遊んでから帰寮していたという。その友人と「国領憩いの家」や青山学院沓掛学荘、YWCA宗教部などの行事と一緒に参加していたという。

キリスト教倫理の気賀重躬（けがしげみ）¹³先生が週に一回夕礼拝に来られて、聖書の輪読をしていた。その際関西出身のAさんのアクセントでは「神」が「紙」になっていると笑われた経験を語られた。

大島青松園（せいしょうえん）という国立療養所の中に住いがあったクラスメイトがいたことと、学生YMCAのサークル活動に参加していた1年上の卒業生が長島愛生園の医官と結婚した縁で愛生園の隣の島の光明園家族教会の牧師や信徒との交流がその後生涯を通して続いている。

以上のように、Aさんの日常には常に宗教活動があった。

Bさんは、「青山学院に来たからには」参加しなくてはと考えていた宗教合宿に卒業間際に参加し、掛井五郎先生¹⁴といろいろと語り合ったそうだ。具体的に何を話したかは覚えていないが、宗教合宿ではあるが宗教の話というより「人間としての生き方についてのお話」だったように記憶しているとのこと。礼拝にも出ていたし一度聖歌隊で歌いたいという気持ちもあったというが、なにしろテニスで忙しかったので時間がなかったようだ。

Cさんは短大の礼拝に熱心に出ていたわけではなかったとのことだった。

3-5 その他

Bさん、Cさんは共に1965年3月に卒業されている。つまり、2年生の時に東京オリンピックを身近に経験されている。Bさんによると1年の時は都電があって、15円くらいで日比谷公園や目白の学習院とか遠くまで行けてとても便利だった。ところが2年になるとそれが一切なくなって、青山通りが今の広さになったという。オリンピック開会式の10月10日は学校も休みで記念すべき日に「一生記憶に残るようなことをしよう」とテニス部の副部長とマネージャーと3人で東京タワーに上って望遠鏡で点火している聖火台を見たという。

Cさんは教育実習がオリンピック開催期間と重なり、しかも実習先が原宿中学で学校から聖火台が見えていたという。生徒と、付き添いの先生方が観戦に行ってしまったりでまともに実習もできず、生徒たちは自習が多く、数学等ほかの教科のお手伝いをし、実習はオリンピックと共に終了したとのことである。教職課程は必須ではなかったがそういう制度があるなら中学校の二種免許ぐらいとっておこうと取得したが、実習をして自分には向かないと思ったという。

時代の大きな変化の中で、若い女性が自分のペースは崩さずに面白がっているように感じる。

4. 在学時、青短は自身にとってどんな場所だったか

Aさんは、「解放感」があったと語られた。「自己実現ができもしないのに、できるような感じ」と。「解放感っていうものはもう、ほんとに、ほんとに気持ちがいいね」と語られた。Bさんは短大はものすごく忙しかったが、「ほんとに楽しかった。テストを受けることも、卒論書くのも楽しかった」と語り、Cさんは「居心地のいい場所」と語られ、宗教的にも、ひとりひとりが自分の心と向き合って考えそれを発表するという普連土学園で

慣れ親しんできて身についたものが青短でも違和感なく居心地よかったということだった。

いずれも語られる内容や語り口から伝わってくる印象そのまま、短大時代いかにのびのびと心身の翼を広げていたかということがよくわかる気がする。

5. 卒業後の進路、ボランティア活動など

5-1 卒業後の進路

3人共に、卒業後就職し、その後結婚で離職し実家を離れあらたな場所で生活をスタートされている。

Aさんは、1953年という時代に聞き手が思い込んでいたイメージとは違い、最初から卒業後働くことを考えていたということがまず印象的だった。当時、英文タイプの国家試験を受けるための「商業英語」という科目があり、大変なので受講生も多くはなかったそうだが、Aさんは「短大って、即戦力だから、それはやっとなと困る」と思って履修したという。それでなくても、青短の卒業生は東京はもちろんのこと関西でも引く手あまただったのだが、「商業英語」を取っている人は「もうほんとに引っ張りだこ」だったという。Aさんの実家は松江から大阪の豊中に戻っていたので、Aさんも卒業後は豊中に戻り、父親の勤め先の系列で三和銀行に入り外国為替の部署に配属になったという。女性が「蔑視じゃないかもしれないけれど、低く見られた時代だから」有能な人はたくさんいたが、男性との待遇には差を感じていたという。まだそろばんの時代、残業に次ぐ残業、大晦日など紅白など見たこともない残業だったのに、女子社員はその足で美容室へ行って髪を整え着物を着て、金融機関同士の互礼会に出なくてはならない。「あれはすごく酷い話だったわ」と銀行員時代を振り返られた。所属していた豊中教会の手伝いを頼まれたこともあり、4、5年で銀行を退社された。その後、豊中教会の関係者により東京神学大学在学中の男性が紹介され、その方の卒業を待って、Aさん29歳の時、結婚。牧師となった夫の最初の赴任先福島県三春町へ移る。さまざまなストレスで体調を崩すことも多かったが、そんなときもクエーカーの友人が支えになってくれたという。三春に8年、兵庫県相生に39年。夫の引退後神戸に移り今に至る。

Bさん曰く、高校の良妻賢母教育の影響からか卒業後何になろうという考えが全くなかったし、大学2年になってもテニスの試合であちこち飛び回っているうちに2学期（後期？）も進んだ頃になり「そうだ就職しないといけないんだ」と気づいたという。心配した叔父の紹介で学校事務の仕事につき、1年ぐらい働いて実家で花嫁修業（もともとやっていたお茶、料理学校受講）に入った。交際相手の卒業を待ち、Bさん23歳の時結婚。以降、お連れ合いの実家がある兵庫県在住となる。

Cさんのご両親は、短大進学の時同様卒業後の進路についても、結婚についても、口を出すことはなかったという。そして、ご本人も、「遊んでいるより」「どっかあるかしら」

というぐらいの構えで父親に相談したらここでよければと橋渡ししてくれたのが都内の積水スポンジ工業で、そこに2年間勤めて辞めたとのこと。ご両親は結婚についても干渉しないのだが、親戚や父親の友人など周りが見合い話を持ってきていた。父親の仕事関係の方から紹介された人と26歳で結婚。当時はみんな結婚するものと思っていたから当然という感じであまり深く考えなかったという。

5-2 ボランティア活動など社会活動について

Aさんは、教会に出入りする人たちの姿を見て、まだ作業所などない時代に精神障害者の居場所づくりが必要だと考えて、保健所と協力して、最初は相生教会の一部屋で、紙袋の口ひもを通す仕事と、農家の有志の協力を得て、荒地を借りてサツマイモを収穫し現金化した。それから、倉庫を借りて、本格的に作業所の業務を開始し、相生での精神障害者の自立を目指した。その陰には相生教会の協力によるケーキ作り他の手作りバザーや、パソコンによる事務会計処理等、得がたい援助があった。結婚前の豊中教会の手伝いも含め、教会の運営を長きにわたり支えてこられた。

Bさんが33歳の時に、短大同窓会の関西支部ができ、「ほんとうにうれしかった」という。義父を見送り介護を終えた後、関西支部役員会に入り、その後支部長を6年間勤め積極的に同窓生をつなぐ役割を果たされた。お子さん3人が中学に在学した通算8年間のうち5年間PTA役員として新聞を作ったり、ある時は壁紙の張替えまで、まさしくボランティア活動と言えるが、同時に自身の学びの場でもあったということは先にも書いた通りである。そのお子さんたちの学校が公立ではなかったため、近隣との付き合いが希薄で、地域のために少しは動きたいと考えたBさんは、60歳前ぐらいから民生委員の協力者のようなところに13年間身を置いた。その後民生委員になったが、時を同じくして「一般社団法人茶道裏千家淡交会神戸第一支部」の幹事から常任幹事となり、仕事も増えたため民生委員は引いたとのことだった。この幹事の仕事もボランティアである。

Cさんは非常にひょうひょうと話される方だったが聞いていくと30代で親の会社を継ぐことになった長男の嫁として、住んだこともない関西で、義母、そして、義父の介護を18年間なさっている。その間4人の子どもを育て、PTA役員はずっとやっていたという。強がる風情などみじんもなく、まさに柳に雪折れなしという印象を持った。

さて、BさんとCさんは同学年でしかも同じテニス部に所属していて結婚後は共に兵庫県内に住んでいたのだが、付き合いが続いていたわけではないのだという。同窓会関西支部の第一回総会から参加してきたBさんは、Cさんに声掛けはしていたそうだが、義父母の介護と4人の子育てで忙しかったCさんは同窓会行事に出てくることはなかった。しかし、1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災がお二人の交流の再開のきっかけとなった。Cさんの自宅は地震で全壊したのだという。それを聞きつけたBさんから電話があり、Cさんは翌年から同窓会活動に参加するようになり、すぐに会計担当を引き受け、10年ぐらい会計を担ったという。震災時関西支部の副部長だったBさんは、同窓会名簿をもとに支

部会員全員に安否確認のハガキを出したことなど、当時の同窓会の動きを語ってくださった。

結婚を機に、実家から離れ、友達も知り合いもない初めての場所で子育てし生きてきた女性たちが、青短の同窓生であることでつながりなおし、支え合う、まさにシスターフッドの力を見た思いがする。

6. (今振り返って) 自身の人生にとって青短とはどのような存在か

Aさんは「故郷（ふるさと）みたいな感じ」「ほんとに懐かしい、宝物」「あんな豊かな時代があったから、どんなに苦勞してもいいわと思うぐらいよい時代だった」と語られた。

Bさんは、人生に彩を加えられる豊かな時を過ごしたのではないか、その後PTAの役員も、短大同窓会の関西支部長もためらいなく引き受けた、そういう姿勢につながったかもしれないと振り返った。

Cさんは「原点」と答えられ、在学中の2年間だけでなくその後も含めて感謝の念を述べられた。同窓会活動に参加し始めてからは約30年間、講演会などにも積極的に参加され、その資料やメモも持参して学んだ内容を語ってくださったので、在学中だけでない人間関係と学びの継続を含めて「青短」なのだろう。

言葉は違ったが、一様に今につながる、今の自分を支える存在としてとらえていると理解してよいだろう。

おわりに

私的な感想になってしまうが、まとめを担当したお3人に限らず、本プロジェクトを通して、(表現に語弊があるかもしれないが)「高齢の女性」に対するイメージが色鮮やかに広々と広がるのを実感している。それは翻れば私自身が持ち合わせていた女性観の貧しさの証でもある。ただ、その女性観が長年日本社会が持ってきた貧しさでもあるとしたら、本プロジェクトは青短の女子教育を考察するだけでなく、豊かな女性観の提案にもなっているのかもしれない。また、奇しくも3人中ふたりが直接、間接にクエーカーの普連土学園とのかかわりがあったことは興味深い。青短の卒業生がどこかで同じように誰彼に影響を与えているであろうことも想像された。

結婚により夫の仕事の関係で新たなコミュニティに飛び込まねばならなかった女性たちが、それまでの人生と分断されることなく自分でいられるための核として青短が意味づけられ、また、あらたな場所で続く人生を支える人脈にもなっていることを意義深く受け止めたいと思う。

注

1) 「普連土学園は、1887年（明治20年）、アメリカ・フィラデルフィアのキリスト教フレンド派（クエーカー）に属する婦人伝道会の人々によって女子教育を目的として創立されました。これは当時、アメリカに留学中だった新渡戸稲造と内村鑑三が助言したもので、以後130余年にわたってキリスト教による人格形成を教育基盤としています。なお、本学は日本においてフレンド主義に基づいて設立されている唯一の学校です。

校名の「普連土」という漢字は、津田塾大学の創立者 津田梅子の父、津田仙によって「普（あまね）く世界の土地に連なる」ように、すなわち「この地上の普遍、有用の物事を学ぶ学校」であるようにという願いを込めて考案されました。」普連土学園中学校・高等学校WEBサイト<https://www.friends.ac.jp/about/index.html>「学園沿革」より（2024年1月10日閲覧）

2) 「1926年 国領憩いの家 青年女子の精神・体育の向上と職業婦人の休養のために、緑濃い地に白と緑の調和よき洋館が新築され寄付された。」東京YWCAの沿革と歴史<https://www.tokyo.ywca.or.jp/about/history.html>（2023年9月4日閲覧）

3) 荒牧鉄雄 英文学者・英語教育者。青山学院女子短期大学名誉教授。青短英文学科専任期間：1951年4月～69年3月。1951年～1971年在任。

4) 西島正 青短英文学科専任期間：1950年4月～1966年3月。のちに高等部校長。

5) 菊地裕 青短英文学科専任期間：1950年4月～1980年3月。

6) 桜田佐 フランス語兼任講師：1950年～1960年。

7) 川瀬一馬 青短国文学科専任期間：1950年4月～1974年3月。

8) 馬越宮 青短国文学科専任期間：1950年4月～1970年3月。

9) 加藤楸邨 俳人。本名加藤健雄。青短国文学科専任期間：1950年4月～1974年3月。

10) 池田亀鑑校注〈日本古典全書〉『源氏物語』朝日新聞社、1955年。

11) 西田寿美 青短家政学科専任期間：1961年4月～1976年3月。

12) 青木孝 青短国文学科専任期間：1957年4月～1982年3月。

13) 気賀重躬 キリスト教神学者、牧師。1956年1月より青山学院大学学長。

14) 掛井五郎 青短専任期間：児童教育学科1962年4月～、芸術学科1989年4月～1996年3月。